KOTO-NOBU-LOG.

ハバロフスクへ行ってきました！

ロシアのハバロフスク市内で行われた『室内音楽コンサート』に出演のため、9月29日に成田発ー10月3日帰国のスケジュールで、初めてのロシアを訪れました。

手前が音楽ホール「極東フィルハーモニー」の入り口。
左奥には、14世紀のイコン、エルミタージュ美術館からの寄贈品を含む膨大な作品を収蔵する「極東美術館」の入り口があります。
当日は、ロシア人作家の絵画以外に、オランダ、イタリア、フランス絵画に加え、ドイツ・マイセンのレースのついた繊細な人形やとても緻密な花柄の大柄の花瓶など初めて観るものが沢山ありました。

ハバロフスク市は新潟市との姉妹都市関係を結んでおり、シーズン中にはチャーター便の往来もあるそうです。成田空港からは直行便で約３時間、日本との時差はたったの１時間という、“ご近所異国”でした。

コンサート最後は皆さんとカーテンコール！

今回の公演は、10月1日の「国際音楽の日」に合わせた在ハバロフスク日本国総領事館によるコンサートで、モスクワ音楽院で研鑽を積んだヴァイオリニストの福原すみれさん、ピアニストの渡部乃亜さん、日本からはハバロフスクの音楽家と長年親交の深いヴァイオリニストの谷本潤さんが招かれ出演しました。「国際音楽の日」は、国際的な相互理解を促進するためにヴァイオリニストのユーディ・メニューイン（1916–1999）によって、1975年に提唱され、その後、その主旨に賛同する国で記念事業が行われるようになりました。私も10代の頃に金沢で行われていた「国際音楽の日」公演に参加していた記憶があり、その主旨は知っていたので、今回、極東フィルハーモニーのヴァイオリニストのデニス・リフテルさんをご紹介いただき、春の穏やかな海やカモメの声が飛び交う様、漁師が勇壮に海へ出る様子など、私が持っているイメー

ジを話しながら前日と当日のリハーサルを通して宮城道雄作曲《春の海》を共演しました。そのリフテルさんがヴァイオリンで演奏する尺八パートの節回しは、なんだかロシア語のニュアンスが感じられ、現地の方との共演であらためて音楽と言語の結びつきを実感しました。もう1曲は、ユーラシア大陸から毎年やってくる渡鳥と両国の交流に対する思いを重ね合わせ、沢井忠夫作曲の箏独奏曲《鳥のように》を演奏し、2曲とも大変喜ばれました。

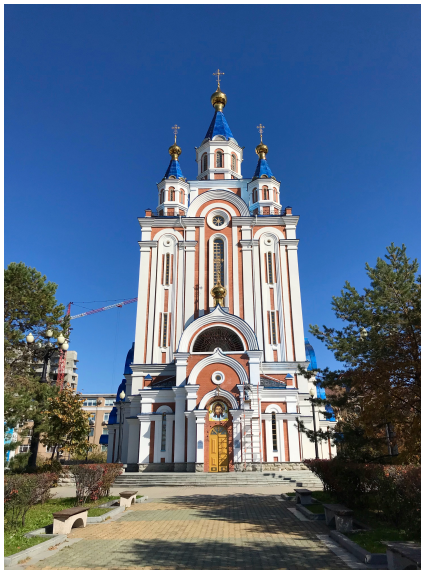
展示品を一つ一つ案内して下さった極東美術館の学芸員 マリーナさんと、アムール川を背景に美術館のバルコニーにて

ロシアのコンサートでは、曲間に司会者（あるいは指揮者）が演奏される曲や音楽についてを解説する習慣があるそうで、この日も音楽学者のスヴェトラナ・ルィセンコさんが司会をしてくださり、現地の皆さんは、とても熱心に聴き入るとともに、演奏が終わると盛大な拍手と手拍子で気持ちを伝えて下さり、私の方がとても感激しました。

現地テレビ局での収録も

翌日は、現地のテレビ局での収録があり、朝一でスタジオ収録に向かい、インタビューを含めた番組を収録してきました。収録した番組は、現在YouTube上（ https://youtu.be/-i7_TUn44N8 ）でも観ることができるようです。

市内は、1日あれば各所見て回れるくらいコンパクトな街のようで、宿泊していたホテルやホールの周辺では、寺院やアムール川、散歩に最適な遊歩道の散策も楽しめました。また、すごい急斜面の坂道（本当に急勾配で、雪が降ったら大変そうでした）や年月を感じる路面バスは、なんだか物見心がくすぐられました。



ホテル近くにあったウスペンスキー聖堂

今回、天候にも恵まれ、とてものんびりと、気持ちの良い滞在ができたことに感謝しつつ、ぜひ再びハバロフスクを訪れたいと思いました。